

近郊野菜産地における近年の変化

——神奈川県三浦市における輪作体系を中心にして——

石井 史子

三浦市は東京都心から60km、三浦半島の先端に位置する。明治時代からだいこんの特産地として知られるが、大消費地への近接性、温暖な気候などの地域特性を生かして京浜地域の近郊農業産地として発展してきた。

従来、稲・麦・芋類・雑穀などの主食の確保を中心とした農業経営であったが、1960年代になって、農家は経営規模を拡大し、だいこん・キャベツ・スイカの生産に特化し、これらの主産地として農業生産を再編した。本論は、神奈川県三浦市における輪作体系を中心にして近年の近郊農業地域の変化を明らかにすることを目的としている。

三浦市の農業経営は、だいこん（またはキャベツ）——キャベツ——スイカを基本とした年2作、3作の輪作によって、比較的狭い経営面積で高収益をあげている。1975年以降、スイカの価格低迷により、夏作に一部カボチャ、メロンが導入された。1980年代になって、冬作物のだいこんの品種が三浦だいこんから青首だいこんに変化した結果、栽培比率が上昇した。冬作物にはだいこんかキャベツが選択される。だいこんは単位当たり投下労働力時間が多いが、高収益を確保できるのに対して、水田の裏作物として導入されたキャベツは、省力的であっても収益は低く、さらに現在主流の春系の品種は寒害を被りやすいという問題をもっている。

三浦市の農業地域を農業集落地区別にみると、昆沙門は水田面積が大きかった地域で、比較的大きな経営規模でだいこん栽培を中心に行っている。和田と諸磯・小網代は経営規模が小さく冬キャベツの栽培比率が高い地域として特徴付けられる。労働力と塩害に規定されて相対的にキャベツ栽培

の割合が高くなっている。

現在、だいこん・キャベツは主産地として生産・流通が確立しているが、カボチャは産地化に成功はしたものの輪作体系に取り込むのに問題をかかえている。夏作物は産地間の競合が激しく、とくにスイカの生産量は伸び悩んでいる。

流通販路の多角化という点から注目されるのは、2年前に設立された野菜直売会である。特定野菜の小品目大量生産・出荷、地元消費者に地場の野菜が供給されないという農産物流通の問題に対する対応でもある。今のところ、野菜直売会の規模は小さいが、特産地から主産地へ変化した次の段階として、広域流通と並行し、地場流通の重要性を認め、農家が直売を経営に採り入れ始めた意味は大きい。

三浦市は、市域の97.3%が都市計画区域に指定され、その25.3%が市街化区域に組み込まれている。他の近郊地域と同様に都市化の影響を強く受けているが、市街化調整区域内の農地の大部分は農業振興地域に指定され、農業以外の土地利用は制限されている。

「地域」の農業という点からみると、前述の野菜直売会は地元生産者と消費者を結ぶものとして位置づけられるが、それだけでなく、新たに三浦市に移住した住民との交流の場として、小学生を対象に農家に宿泊する「農業体験学習」などの試みもなされている。現在、農業を取り巻く環境は厳しく、農業の存続が問題となっている。農業振興地域としての制度的指定は、三浦市のように都市化が進展する地域では重要な要因となる。加えて、「地域」における農業の存続の条件がそれぞれの地域において追求されることが必要であろう。